

# 私にとっての「研究」とは

## —学会で学ぶということ—

第2回は、私の大学院での経験をもとに感じた「研究の違い」について書かせていただきました。今回は、「学会で学ぶということ」について書かせていただきます。

私は大学院に入学する前から、日本生活科・総合的学習教育学会に所属し、研究大会に参加していました。そこで、多くの先生方の研究発表を聞き、その先生方とお話をさせていただくことによって、知見を広げてきました。私は、それだけで学会に参加する価値があると考え、満足していました。

しかし、兵庫教育大学大学院で私の指導教官であった溝邊和成先生は違いました。大学院入学直後から、私に学会発表を強く勧めてくださいました。正直なところ、とても戸惑いました。学会で発表できるほどの実践を積んできたわけでもない、研究の方向性も決まっていない、発表の方法さえわかっていない、そんな状態だったからです。

(ちょっと失礼になりますが、) 溝邊先生は、そんな私の状態などお構いなしに、「〇〇という研究会があるから、そこで実践を紹介しない?」「キャリア教育を研究の中心とするなら、キャリア教育学会での発表は絶対条件じゃない?」「来年のキャリア教育学会で発表するまでに、別の学会でも経験を積んだ方がいいのでは?」と次から次へといい意味でのプレッシャーを与えてくださいました。私は、何とかそれに応えようと思いました。先週のゼミではOKでも、今週のゼミでは全て覆ることもありました。しかし、その度に鍛えていただいている実感がありました。

学会で研究者として発表するには、第2回で記したように客観的なデータが必要でした。同時に、私の研究を意味付ける理論も必要でした。私が用いた理論は、ICE\*モデルでした。これは、今までろくに本を読んでこなかった私が、大学院の図書館でたまたま手にしたものでした。私にとっては、運命的な出会いだったといえます。このICEモデルが、私の前の霧を払ってくれたからです。

ICEモデルを活用した小学校での授業実践を柱に、私はいくつかの学会で発表させていただきました。その度に、本当に多くのことを学ばせていただきました。

まずは、やはり発表をするための準備でした。小学校現場で授業を行い、データを分析し、考察をまとめ、なるべくわかりやすく表現しようと努力しました。Power Pointの使い方やわかりやすいデザイン方法も学びました。

次に、私の発表を聞いてくださった方からのご意見が、何よりの学びとなりました。私の発表を始めて聞く方々でしたから、とても新鮮で、多角的な意見をいただきました。私の大好物となった批判的な意見もいただきました。

最後に、発表を終え、ゼミでリフレクションすることでした。自分の研究の進捗、軌道修正、次への課題などが明らかになりました。

学会発表は、大変です。その思いは今も変わりません。ですが、大変な分だけ多くの実りがあると実感しています。ですから、一度足を踏み入れてしまうとやめられなくなってしまう魅力があると思います。溝邊先生から学会発表を勧められたときは、「絶対無理！」と思っていたのですが、今では「来年はどんな発表をしようか…」と考えてしまうようになりました。

昨年度、今年度と、この日本キャリア教育学会の研究大会でも発表をさせていただきました。第41回長崎大会では、恐れ多くも研究大会優秀発表賞を賜りました。今までいわゆる「賞」とは無縁の人生を送ってきましたから、驚きしかありませんでした。この賞をいただいたことは、本当にありがたいことですが、これは全て、溝邊先生をはじめ兵庫教育大学大学院の先生方のご指導、院生仲間の支え、授業実践をさせていただいた兵庫県加古川市立氷丘南小学校のご支援、何より私の拙い授業に全力で応えてくれた子どもたちのおかげだと思っています。

学会で学ぶということは、ただ参加していろいろな実践を聞くだけではもったいないと今では思います。自分の研究を自分の言葉で語り、多くの意見をいただき、さらに磨きをかけられる、そんな実りの多い学びの場であると思います。

最終回は、『研究』を支える人とのつながり』について、多くの方々への感謝を記していきたいと思っています。

※ Sue Fostaty Young & Robert J. Wilson (土持ゲーリー法—監訳 小野恵子訳)  
(2013)「主体的に学び」につなげる評価と学習方法—カナダで実践される ICE  
モデル— 東信堂

(加古川市教育委員会 伊藤良介)